



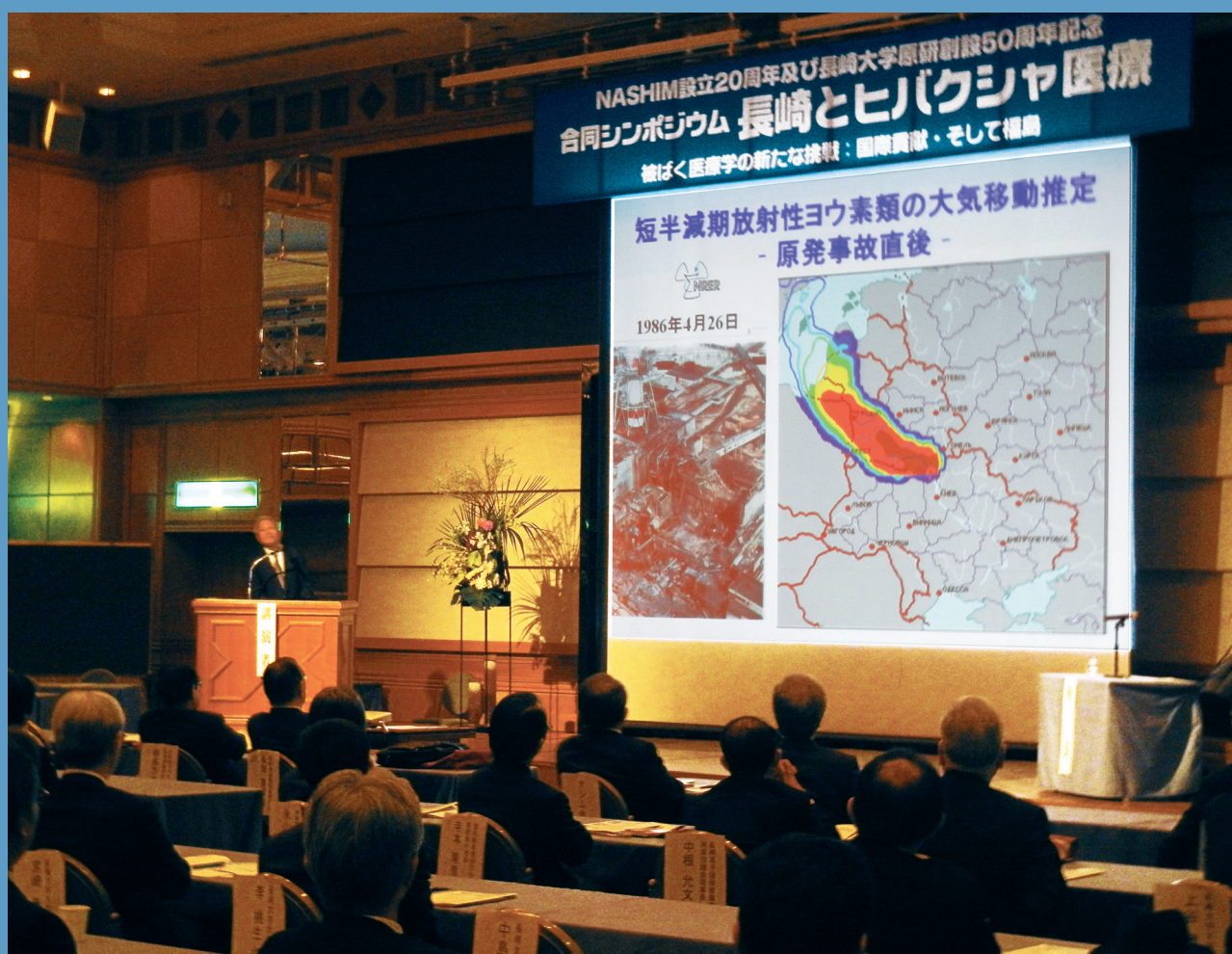
Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

Vol. **33**
2013

ヒバクシャ医療国際協力会通信

- CONTENTS
- ナシム20周年・原研50周年合同シンポジウム「長崎とヒバクシャ医療」
 - 第9回永井隆平和記念・長崎賞授賞式
 - 韓国への専門家派遣事業
 - 韓国医師等の受入研修事業
 - 出前講座



ナシム20周年・原研50周年記念合同シンポジウム「長崎とヒバクシャ医療」での講演の様子

NASHIM設立20周年及び長崎大学原研創設50周年記念
合同シンポジウム (原子爆弾被爆者指定医療機関等医師研究会)

長崎とヒバクシャ医療

被ばく医療学の新たな挑戦：国際貢献・そして福島

開催日時

第1日目 2013年2月9日 土
13:00~17:30 (開場12:00)

一般公開

- 第9回永井隆平和記念・長崎賞授賞式
- シンポジウム

第2日目 2013年2月10日 日
9:30~15:00 (開場9:00)

医療関係者の
方が対象です

- 講演及びセミナー (原子爆弾被爆者指定医療機関等医師研究会)

会場

ベストウェスタンプレミアホテル長崎
3階「プレミアホール」 (長崎市宝町2-26)

主催：長崎ヒバクシャ医療国際協力会 (NASHIM)、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科附属原爆後障害医療研究施設 (原研)、長崎県
共催：長崎県医師会、長崎市医師会 後援：厚生労働省、文部科学省、放射線被曝者医療国際協力推進協議会 (HICARE)、長崎市

2013年2月9日と10日の両日、 長崎市内で「NASHIM設立20周年・長崎大学原研創設 50周年記念合同シンポジウム」を開催しました。

その内容をご紹介します。

【開会挨拶】 主催者として、次の3名が挨拶を行いました。

- 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会会長 蒔本 恭
- 長崎大学学長 片峰 茂
- 長崎県知事 中村 法道



ナシム会長 蒔本 恭
(長崎県医師会会長)



長崎大学学長 片峰 茂



長崎県知事 中村 法道

蒔本ナシム会長あいさつ

本日、「ナシム設立二十周年・長崎大学原研創設50周年記念合同シンポジウム」を開催いたしましたところ、このように多くの皆様方のご参加を賜り、心からお礼を申し上げます。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会、通称ナシムは、在外被爆者及び世界各地で発生した放射線被曝事故による被災者の救済を目的として、長崎大学、日赤長崎原爆病院、放射線影響研究所、県・市医師会等の医療機関と県、長崎市が構成メンバーとなり、平成4年4月に設立いたしました。

以来、被爆地・長崎が有する被爆者医療の実績と、放射線障害に関する調査研究の成果を、世界のヒバクシャ医療の向上に有効に活用していただくため、国外の医師の受入研修や海外への専門医師の派遣、医学教科書の出版、小中学校等での出前講座開催などの事業を継続して行い、今年度で設立20周年を迎えたところであります。

この間、平成7年に、永井隆博士の崇高な平和希求の精神を受け継ぎ、将来に向けた原爆関連医療の遺産を継承する「永井隆平和記念・長崎賞」を創設し、国際社会におけるヒバクシャ医療への貢献者を隔年で顕彰しております。本日も後ほど、本年度の受賞者であるウクライナ医学アカデミー内分泌代謝研究所所長 ミコラ・トロンコ様の授賞式を実施することとしております。

また、一昨年の東日本大震災に伴う福島第一原発事故に際しては、放射能に対する大きな社会不安が生じたことから、東京において連続3回のシンポジウムを開催するなど、放射能を正しく理解してもらい、風評被害をなくすための啓発活動にも積極的に取り組んでおります。

当協会といたしましては、20周年を大きな節目として、引き続きヒバクシャ医療を通じて、長崎から世界への貢献と、国際協力の推進に全力を挙げてまいり所存でありますので、皆様方の変わらぬご支援・ご協力をお願い申し上げます。

さて、本日と明日の2日間にわたり、私どもナシムと、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科附属原爆後障害医療研究施設の合同記念事業として、「長崎とヒバクシャ医療」をメインテーマとしたシンポジウムを開催いたしますが、この取り組みが、今後のヒバクシャ医療の向上・発展に少しでも役立つものとなれば幸いに存じます。

最後に、シンポジウムへの出席をご快諾いただいた講演者の方々と、開催にご尽力いただいた関係機関の皆様にご心からお礼を申し上げます。



会場全体の様子 (1日目)

[ナシムと原研の沿革紹介]

主催者から、設立 20 周年を迎えたナシムと、創設 50 周年を迎えた原研の沿革紹介を行いました。

- 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会運営部会長 上谷 雅孝 (長崎大学大学院教授)
- 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科原爆後障害医療研究施設長 永山 雄二

[来賓挨拶]

- 環境大臣政務官 秋野 公造 様
- 衆議院議員 北村 誠吾 様
- 文部科学省高等教育局医学教育課長 村田 善則 様
- 厚生労働省健康局総務課原子爆弾被爆者援護対策室室長補佐 有賀 玲子 様
- 広島大学原爆放射線医科学研究所長 神谷 研二 様
- 長崎市長 田上 富久 様



環境大臣政務官 秋野 公造 様



衆議院議員 北村 誠吾 様



文部科学省 村田 善則 様



厚生労働省 有賀 玲子 様



広島大学 神谷 研二 様



長崎市長 田上 富久 様

第1日目 2月9日(土) シンポジウム

○ 記念講演

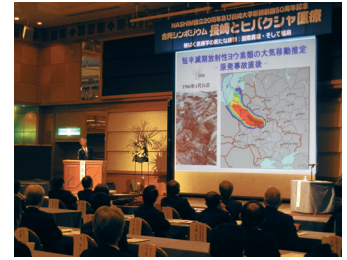
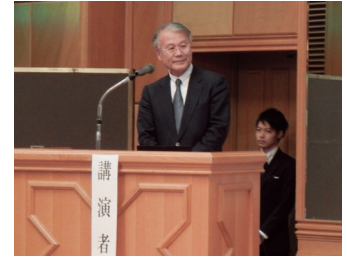
講師 **山下 俊一** 氏

福島県立医科大学副学長、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授

演題 **「科学技術文明の光と影：原研と NASHIM の世界展望」**

山下副学長の講演概要

人類史の中で放射線や放射能の発見からすでに100年以上が経過し、この間、常に過剰被ばくによる健康影響が話題となってきた。科学技術文明の進歩が醸し出した光と影が最も鮮明に位置づけられるのが、放射線事故・災害に伴う健康リスクであり、社会リスクである。特に、広島・長崎の原爆被災による急性ならびに慢性の放射線障害への対応には、基礎ならびに臨床医学における後障害医療研究を不可欠としてきた。チェルノブイリ原発事故から福島原発事故の関わり合いを含めて、長崎における原爆医療と医学研究の将来展望を探る。



○ 記念講演

講師 **朝長 万左男** 氏

日本赤十字社長崎原爆病院院長、長崎大学名誉教授

演題 **「原研における原爆後障害研究の評価と今後の課題」**

朝長病院長の講演概要

研究活動は半世紀を超え、放射線の人体影響の「生涯持続性」を明らかにしつつある。急性放射線症による死亡率を明示した長崎医科大学の調来助教授と医師・学生らによる調査研究に淵源をもつ後障害観察が50年の長きにわたり続けられてきた。初期後障害である白血病の治療対応に迫られる中、原研は創設され、現在もなお癌と白血病の持続および多臓器被ばくによる「多重癌」の実態が明らかにされつつある。1945年に臓器幹細胞のDNAが傷つき、遺伝子不安定性を引きずり、発がんに至るものと考えられる。被爆者の医療を担うべく創設された原研の業績をふりかえるとともに、今後の課題を展望する。



○ 特別講演

講師 **長瀧 重信** 氏

長崎大学名誉教授、放射線影響研究所元理事長

演題 **「長崎を世界に」**

長瀧名誉教授の講演概要

演者が長崎に赴任した1980年は、NASHIMは設立前、原研は創設17年目であった。「長崎を世界に」をモットーに、長崎から世界に発信できるテーマを求めて努力するなか、被爆した唯一の大学を再認識し、チェルノブイリ事故調査にも協力した。その経験が福島での長崎と長崎大学の貢献として活用されている。今後も、同じ目線で国内外の様々な組織と密接に協力しながら、人材の育成、知識の共有並びに拡大を通じ、長崎大学が世界のセンターであり続けることを祈っている。



第9回永井隆平和記念・長崎賞授賞式

ウクライナのミコラ・トロンコ氏に授与



ナシムでは、故・永井隆先生の崇高な平和希求の精神を引き継ぎ、その継承者を育成し、将来に向けた原爆関連医療の遺産を継承することを目的として、平成7年に永井隆平和記念・長崎賞を創設。原子爆弾による被爆者及び放射線被曝事故等による被災者に対する治療及び調査研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じて世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人や団体を表彰しています。

今回で第9回となる永井隆平和記念・長崎賞授賞式を合同シンポジウムの中で行いました。

ウクライナから来日された受賞者ミコラ・トロンコ氏に、蒔本ナシム会長から賞状と賞碑（ブロンズ像「生命のともしび」）、副賞の賞金を授与しました。

受賞者紹介

ミコラ トロンコ

1. 氏名・年齢 **Mykola Tronko** (68歳 ウクライナ)

2. 主な経歴

- ・1961年 9月～1967年 6月 キエフ医療研究所内科医
- ・1967年 9月～1970年 9月 内分泌代謝研究所研究員
- ・1971年11月 医学準博士号取得（専攻：内分泌学）
- ・1981年 4月 内分泌代謝研究所副所長
- ・1984年 7月 医学博士号取得（専攻：内分泌学）
- ・1986年 3月～現在 ウクライナ医学アカデミー内分泌代謝研究所所長
- ・1989年12月 教授
- ・1992年11月 ウクライナ科学アカデミー客員（専攻：放射医学）
- ・1993年 4月 ウクライナ医学アカデミー客員（専攻：内分泌学）
- ・2010年 9月 ウクライナ医学アカデミー会員（専攻：放射線内分泌学）



3. 主な活動

1986年 4月	チェルノブイリ事故後、最汚染地域から避難した子供たちに対する内分泌検査および治療を実施
1989年 1月	チェルノブイリ事故で被曝し、甲状腺病変、特に甲状腺がんを発症した子供や若者たちを対象に外科治療を実施
1991年 1月	検査対象者に対する甲状腺病変の術前診断プロセスに穿刺吸引生検を導入
1991年 2月	チェルノブイリ事故で被曝したウクライナの子供や若者たちの甲状腺がん臨床形態学記録を作成・管理

1995年 2月	チェルノブイリ事故で被曝した子供や若者たちへの放射性ヨードによる術後療法のための専門の臨床放射線科を創設
1998年10月	ウクライナの国際チェルノブイリ甲状腺組織バンクを設立
1998年11月	ウクライナのより汚染のひどかった地域の被曝者に対するスクリーニング検査をウクライナーアメリカ甲状腺プロジェクトの枠組み内で実施
2011年 1月	チェルノブイリ事故で被曝したウクライナの子供や若者たちを対象とした甲状腺がんの分子疫学調査を長崎大学と共同で実施



第9回永井隆平和記念・長崎賞受賞者を囲んでの記念写真（前列中央が、受賞者のミコラ・トロンコ氏）

第2日目 2月10日(日) 講演及びセミナー

(原子爆弾被害者指定医療機関等医師研究会)

○ 講演

講師 **有賀 玲子 氏**

厚生労働省健康局総務課 原子爆弾被爆者援護対策室室長補佐

演題 **「原子爆弾被爆者援護行政について」**



講演概要

本講演においては、原子爆弾の被害及び被爆者援護施策の沿革として、過去の国の施策および現在の被爆者に対する援護の仕組みについて解説する。また、特に原爆症認定について取り上げ、現行の原爆症認定制度の概要やこれまでの経緯、現在開催されている原爆症認定制度の在り方に関する検討会等について紹介する。

○ セミナーⅠ

講師 **佐々木 英夫** 氏
広島原爆障害対策協議会 健康管理・増進センター所長
演題 **「HICARE の活動及び被爆者健康管理について」**



講演概要

放射線被曝者医療国際協力推進協議会 (HICARE) は 1991 年に、被爆者治療の実績と放射線障害に関する研究の成果を国内外の被曝者医療に生かしていくために設立された。広島原爆放射線の医療に関わる 8 つの機関と行政機関の連合体で、受け入れ研修、専門家派遣、講演会の開催、出版などの事業を展開している。本講演では HICARE の事業とともに、被爆者の健康管理の現状および課題を提示する。

○ セミナーⅡ

講師 **高村 昇** 氏
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授
演題 **「長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 (NASHIM) : これまでとこれから」**



講演概要

長崎ヒバクシャ医療国際協力会 (NASHIM) は 1992 年に、在外被爆者及び世界各地で発生している放射線被曝事故による被災者の救済を目的として設立されヒバクシャ医療を通じ長崎から世界への貢献と国際協力の推進に努めてきた。本講演では、NASHIM の国内外での活動実績を紹介し、今後の展望について概説する。

○ セミナーⅢ

講師 **永山 雄二** 氏
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 原爆後障害医療研究施設長
演題 **「放射線と甲状腺癌：最近の知見」**



講演概要

長崎・広島原子爆弾被爆者、チェルノブイリ原子力発電所事故周辺住民のデータを基にした放射線誘発甲状腺癌の臨床疫学調査結果、癌遺伝子や甲状腺癌感受性遺伝子の基礎研究を紹介し、福島原発事故後の現状も概説する。さらに放射線誘発癌基礎研究の現状と将来展望も紹介する。

○ セミナーⅣ

講師 **赤星 正純** 氏
放射線影響研究所 臨床研究部長
演題 **「放射線被曝の影響」**



講演概要

一昨年(2011年)の東日本大震災の際の津波により引き起こされた福島原発事故後、放射線被曝による健康影響に注目が集まった。この放射線被曝による健康影響は、主に原子爆弾被爆者を長期追跡調査することにより明らかにされた。この事を踏まえ、放射線影響研究所で長期追跡調査を行っている被爆者集団の成り立ち、そこから得られた放射線被曝の「がん」及び「がん」以外の疾患に及ぼす影響について説明する。

韓国への専門家派遣 ～被爆者医療セミナーの開催～

1回目は12月に、陝川（ハプチョン）の医療機関を訪ねるとともに、陝川原爆被害者福祉会館で被ばく者医療セミナーを行いました。

2回目は2月に、ソウル市内で大韓赤十字社本部を表敬訪問するとともに、韓国で被爆者治療に従事している医師等医療関係者に対し、広島・長崎の被ばく者医療の最新の知見と、福島第一原子力発電所事故への対応や健康影響について講演するため、広島の放射線被曝者医療国際協力推進協議会（HICARE）と初めて合同で実施しました。

各回の日程や講演者及びセミナーの内容は次のとおりです。

1 回目

【日程概要】

- 12/ 9 長崎出発
- 12/10 陝川で関係先訪問、セミナー実施
- 12/11 帰国

講演者 長崎大学先導生命科学研究支援センター 教授 松田 尚樹 氏
「放射線とその被ばく影響の基礎」

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 医療科学専攻
 リハビリテーション科学講座 精神障害リハビリテーション学分野

教授 中根 秀之 氏

「被ばくの精神健康影響とそのケア」



講演を行う松田教授



講演を行う中根教授



現地コーディネイトをしていただいた大韓赤十字社特殊事業所の呉さんです。大変お世話になりました。

「NASHIM 専門家派遣事業セミナーに参加して」



長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 医療科学専攻
リハビリテーション科学講座 精神障害リハビリテーション学分野
教授 **中根 秀之**

2012年12月9日から11日の日程で、韓国ハプチョンでNASHIMの専門家派遣事業に参加させていただきました。韓国に到着したのが、9日の夜でしたので、翌日10日朝からプサンからハプチョンにむかいました。長崎からの参加者は、私以外に長崎大学先端生命科学

研究支援センターの松田尚樹教授と、ナシム事務局の熊さんの3人でした。

現地では大韓赤十字社のスタッフである呉尚恩さんも同行し、10日は、朝よりハプチョンにあるハプチョン原爆被害者福祉会館にて、在韓被爆者現況の説明を受け、同施設の見学も行いました。ここは、日本と韓国両政府が負担してできた被爆者のための施設で、現在101人（男性27人、女性74人）が生活しておられました。福祉サービスの提供とともに、看護師や理学療法士が配置されているため、園芸療法などの様々なリハビリテーション活動も行われていました。身体疾患のみならず、認知症のケアも必要であり、スタッフの研修が実施されていると聞きました。高齢化している被爆者の深刻な問題の一つを垣間見る感じがしました。その後、ハプチョン市内にある被爆者医療にかかわる医療機関を見学させていただきました。



○ハプチョン高麗病院

チュ・チョンジャ理事から施設の説明を受けました。精神科、老年科を現在ある病院で主に治療を継続し、一般診療科を市街地の中心部に新病院を建てて移す計画であることを聞きました。精神科病棟の内部を拝見することはできなかったことは、少し残念でした。しかし、急なお願いであったにもかかわらず、勤務していた医師にお会いして、韓国での精神医療の現状について意見交換できたことは、大変貴重な経験でした。

○ハプチョン病院

キム・ジンテ院長によるこれまでの活動と今後のビジョンについてプレゼンテーションを聴かせていただきました。ハプチョン病院の位置づけは、家庭医の役割を果たす医院と、大規模な総合病院の間に位置する病院としての性格を持っているとのことでした。今後急性期だけではなく、療養病棟の併設も行い、積極的に韓国の被爆者医療について協力していきたいと述べておられました。

6時から、再び福祉会館に戻り、NASHIMセミナーを行いました。参加者は、30名を越え、用意した座席は満席でした。初めに、大韓赤十字社の呉さんから、このセミナーの説明と講師紹介をしていただきました。

まず長崎大学先端生命科学研究支援センターの松田尚樹教授が、放射線に関する知識について、福島の実状も含めてお話しされました。たいへんわかりやすく、ユーモアを交えた明快なお話だったので、参加者からも専門的な質問が出され興味の高さを感じました。

次に、私から被爆者の精神健康として原爆被爆に関する精神的健康問題とトラウマを抱えた人へのケアの二つのテーマについてお話しさせていただきました。原爆被爆に関する精神的健康問題について、長崎の被爆者に関していくつかの精神健康に関する研究が報告されています。しかし、被爆後自身の国に引き上げた在外被爆者に関する精神的問題に関する研究やサポートに関する報告はほとんど見られないのが現状でした。このため在韓被爆者の精神健康状態の把握の為、大韓赤十字社やキョンヒ大学精神科の協力のもと行った在韓被爆者の精神的健康について実態調査の結果をお話ししました。精神健康に何らかの問題がある人の割合は被爆者群50.7%に対し、対照（非被爆者）群26.8%と有意差がみられました。さらに被爆体験の有無が精神健康の悪化に影響を及ぼしていることが示唆されました。在外被爆者の精神健康に対するケアの必要性が示されたわけです。



続いてトラウマを抱えた人へのケアについて説明しました。原爆被爆者の痛みとは、身体的問題、身体疾患などの身体的痛み、不安、抑うつなどの精神的痛み、偏見や差別、社会的不利などの社会的痛みであり、全人的痛みという理解が必要であることです。被爆者の心理は大変複雑です。被ばく経験に伴う抑うつ、不安、絶望。遺されて感じる罪悪感や怒りもあります。どうして私は生き残ったのか。身体的にも問題を抱えます。自分の身体的不調に加え、家族の身体的不調もとても不安になります。被爆後に、偏見・差別を受けることもあります。その一方で、回復への期待を持っています。こころのケアをどのように行うのかということは大変重要です。こころのケアに対して、魔法のような効果があるのではないかという期待がある一方、精神医学的問題に対する偏見、差別からケアは不要という方がいらっしゃいます。被爆者のケアで重要なことは、安心・安全の保障、正しい知識と対処法、主体性とペースが守られること、治療システムの構築などの事柄であることを説明しました（表1）。

表1 こころのケアのポイント

1. 安心・安全の保証

- ・生命財産の安全や当面の生活基盤の確保
- ・守られている、一人じゃない
- ・周囲が徐々に落ち着いていく
- ・危ない、怖いところには近づかなくてよい
- ・無理の無い範囲で日常生活を回復

2. 正しい知識と対処法

- ・予測される反応と対処法
- ・異常な事態への正常な反応という理解※

3. 主体性とペースが守られること

- ・話したいことを聞いてもらえる
- ・話したくないのに根掘り葉掘り聞かれない
- ・自分なりの方法とペースが尊重される

4. 治療システムの構築

- ・一般科と精神科との連携
- ・医療機関・公的機関との連携

韓国では、現在自殺者の急増が問題となっています。OECDの2010年データでも世界一位の自殺者となっており、特に高齢者の自殺は日本や米国の4-5倍といわれています。このため高齢者のケアは大変重要であり、精神健康の重要さが実感されていると思います。そのため、この時期にこのような機会を得ることができたのはたいへん貴重な経験でした。ご協力いただきましたNASHIM関係者、大韓赤十字社、長崎県をはじめ多くの方々に心より御礼申し上げます。

2 回目

主催：HICARE 共催：NASHIM 協力：韓国原子力医学院 (KIRAMS)、大韓赤十字社
会場：ソウル プレジデントホテル 対象：医師等医療関係者

【日程概要】

- 2/19 長崎出発
- 2/20 ソウル市内で関係先訪問、セミナー実施
- 2/21 帰国

講演者 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科（原研内科） 教授 宮崎 泰司 氏
「原爆被爆者のための医療」

なお、HICAREの講演は次のとおり

講演者 放射線影響研究所 理事長（HICARE会長） 大久保 利晃 氏
**「HICARE活動内容の紹介及び原爆放射線の
健康影響調査における最近の研究成果」**

広島大学救急医学 教授 谷川 攻一 氏
「福島第一原子力発電所事故の対応」

放射線影響研究所 主席研究員 児玉 和紀 氏
「福島の原子力発電所事故による被曝レベルとリスク」



講演を行う NASHIM の宮崎教授

「韓国での放射線被曝者医療セミナーに参加して」



長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 原爆・ヒバクシャ医療部門
血液内科学研究分野（原研内科）

教授 **宮崎 泰司**

今回、広島のHICAREとの連携事業として、韓国（ソウル）で「放射線被ばく医療セミナー」が開催されました。

HICAREはこれまでに医療関係者を主な対象として、放射線被ばくに関するセミナーを米国などで実施しておられます。一方、長崎県では在韓被ばく者の健康相談事業を、NASHIMでは在韓被爆者の診察・治療などを行う医療関係者に対し、被爆者医療セミナーを行う派遣事業や長崎での受入研修事業を実施してきました。今回、HICAREがソウルでセミナーを開催することになり、韓国でこれまで活動してきたNASHIMとの連携を希望され、こうした形が実現したことになります。セミナー実施に当たっては韓国原子力医学院(KIRAMS)、大韓赤十字社のご協力を得て実施されました。

2013年2月20日にソウルのプレジデントホテルにて70名を超える方が参加しての開催となりました。大久保利晃先生（HICARE会長、放射線影響研究所理事長）、児玉和紀先生（HICARE幹事、放射線影響研究所主席研究員）、

谷川攻一先生 (HICARE幹事、広島大学救急医学教授) の3名がHICAREからの演者として、私がNASHIMからの演者として計4名が放射線被ばくに関連することをお話ししました。セミナーではまず、大久保会長がHICAREの説明をなさり、日本での放射線の人体影響研究の代表として放影研での原爆被爆者研究の概要をお話になりました。その後、谷川先生から福島第一原子力発電所の事故に対する医療活動、児玉先生からその事故での被爆に関するお話がありました。私はNASHIMの紹介と、被爆者にみられる主に血液悪性腫瘍 (白血病と骨髄異形成症候群) の発生と治療についてお話しし、そのような状況の被爆者の皆さんに対して長崎原爆被爆者対策協議会で行われている検診事業とがん検診の結果をお示しして、原爆被爆者に対する医療の状況を解説しました。



講演を行う HICARE の大久保会長



HICARE と NASHIM の先生方と KIRAMS 関係者
(右から2人目が宮崎教授)

谷川先生、児玉先生のお二人には大変多くの質問があり、福島で実際には何が起こったのか、今何が起きているのか、放射線被ばく事故にどう対応すれば良いのかなど、韓国で原子力発電所事故を含めて放射線事故に関する大変強い関心があると感じました。また、セミナー後の会食では私のところへも被爆者の血液疾患の治療について数名の方が質問にこられ、一定の興味は持って頂けたのではないかと思います。

HICAREとの連携事業として韓国で医療関係者に対して講演を行うという試みは初めてでしたが、国外の医療関係者、放射線事故対応の中心となる方々に対してのセミナーも大変意義のあることと感じました。さらに世界のヒバクシャ支援をおこなっているHICAREとNASHIMが今後さらに協力して活動していくことも重要だと思います。

今回、声をかけて頂いた大久保会長始めHICAREの皆様、色々とお世話頂いたNASHIM事務局に御礼申し上げます。



歓迎の挨拶を行う KIRAMS の李院長



セミナーに先立ち、大韓赤十字社事務総長を表敬訪問する
HICARE と NASHIM の先生方

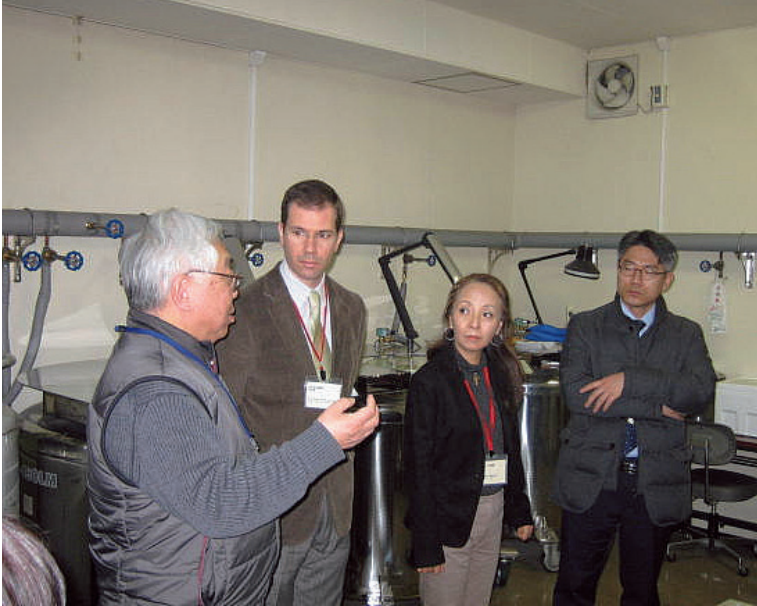


高事務総長に長崎からのお土産を贈る宮崎教授



大韓赤十字社本部前にて
(前列中央は高事務総長。事務総長の右は宮崎教授)

韓国医師等へ被爆者医療研修を実施



放射線影響研究所で説明を受ける研修生たち

韓国に居住している被爆者への医療充実のため、被爆者の医療や援護に携わる韓国医師1名を招いて受入研修を実施した。2月18日から6日間、長崎原爆病院をはじめとする医療機関や長崎大学などの研究機関で、被爆者医療に関する知識の習得や情報交換を行うとともに、原爆資料館などを訪れ被爆の実相についても学びました。

なお、今回の研修では、長崎県が在外被爆者支援事業の一環で招へいたブラジル医師2名（ジョゼ・レナト・ダス・グラス・アマラル氏及びリディア・ミネ・ミヨシ氏）と一緒に研修を受講しました。

【日程概要】

- 2 / 18 長崎到着
- 2 / 19 ~ 22 関係先訪問・見学、
長崎大学（病院）での研修
- 2 / 23 帰国

研修後の感想



嶺南大学病院放射線腫瘍学科専門医

姜 珉珪 (カン・ミンギョ)

今回、ナシムの受入研修に参加して、原子爆弾の恐ろしさを生々しく感じる事ができました。以前は原子爆弾の直接的な影響（破壊力や癌の増加など、目に見える影響）しか考えていませんでしたが、今回の研修を通じて被爆者や被爆者の家族の心理的な苦痛まで感じる事ができ、非常に有益な研修でした。

ただし、研修内容について、ものたりないと感じたのは、ほとんどの講義の内容が今までの研究結果についてだということです。過去の経験を土台にして未来に備えるのが重要だと思います。今後は、過去の経験と研究結果を基にこれからどういう努力（社会的および医学的な研究など）が必要なのかについて考える研修カリキュラムも設けていただければと思いました。もちろん全ての研修対象者が放射線関連の仕事をしているとは限りませんが、そうだとでもかなり役にたつと思います。

私の専攻が放射線と関連があるため、実際に患者さんを診療するとき、長崎での研究結果を使って放射線の影響について説明したり、放射線に関する漠然とした不安を解消することに努めています。長崎でのこれまでの豊富な研究成果についてとても感謝しています。



長崎大学で講義を受ける研修生のみなさん



ナシムの藤本会長を表敬訪問



長崎大学病院の増崎副病院長を表敬訪問



原爆資料館にて



長崎大学医学部良順会館のミュージアムにて

出前講座



NASHIMでは、ヒバクシャ医療を通しての国際協力や放射線被ばく医療等についての知識を普及するため、「平成の鳴滝塾 ～ナガサキでしか受けられない放射線の授業～」と題して、長崎大学の先生方が各地に出向き講義を行う「出前講座」を実施しています。

今年度は、日本原子力研究開発機構核不拡散・核セキュリティ総合支援センター(茨城県東海村)が世界各国の原子力規制等に係る

関係職員等を対象に原子力が核兵器に利用された場合に引き起こされる結果を強く印象づけ、核不拡散の重要性を再認識してもらうための国際トレーニングを行っており、その参加者が被爆地長崎を訪問した際に、出前講座を受講しました。

いずれも、「原爆直後の救護活動と調査」と題して、長崎大学の三根真理子教授が、アニメーションも入れてわかりやすく講義を行いました。

- 【日程等】** 1回目：平成24年10月20日（土） 参加者数34名
2回目：平成24年12月 1日（土） 参加者数25名



10月20日実施の出前講座を受講された皆さんとの記念撮影（手前中央の女性が三根教授）